



営農タイムリー！



発生予察情報について(6月)

2024年5月28日発行

病害虫発生予報第4号(6月)

京都府病害虫防除所より、6月の予察情報が発表されました。

病害虫発生予察第4号(6月) (抜粋)

予報の概要

作物名	病害虫名	予想発生量 (平年比(前年比))
イネ	葉いもち ニカメイチュウ(第1世代) ヒメトビウンカ 縞葉枯病 ツマグロヨコバイ イネミズゾウムシ	多(並) やや多(やや多) 多(多) 並(並) やや多(やや多) やや多(並)
ブドウ	べと病	並(やや少)
カキ	落葉病 うどんこ病	やや多 やや少(やや多)
果樹全般	カメムシ類	多(多)
果菜類	疫病・褐色腐敗病 うどんこ病	並(並) 並(やや少)
キュウリ	べと病 斑点細菌病	やや多(並) やや多(やや多)
ネギ	さび病 ネギハモグリバエ ネギアザミウマ	やや多(並) やや少(並) 並(やや多)
野菜類	アブラムシとモザイク病	やや少(やや少)
果菜類	ハダニ類 アザミウマ類	やや少(少) やや少(やや少)
アブラナ科野菜	コナガ	並

イネ

1. 葉いもち

予報内容 発生量 : **平年比 多い** (前年 並)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 空気伝染し、発病適温は14~30℃(最適25℃)である。降雨あるいは霧などによって長時間イネが濡れ続ける場合は感染に好適である。
- (2) 通常、6月第5半旬頃が初発時期である。
- (3) 補植用苗をそのまま放置すると、葉いもちの発生源となる。
補植後、速やかに残り苗を処分する。
- (4) ほ場を見回り、肥料がムラ効きしているところを中心に、
下葉に発病していないかどうか調べる。特に、畑作跡では注意する。
- (5) 長期持続型箱施用剤を使用していない多肥田や山間、山沿い等の発生しやすいほ場では、曇雨天が続く場合、6月中旬頃に予防のため粒剤などを施用する。



2. ニカメイチュウ (第一世代)

予報内容 発生量 : **平年比 やや多い** (前年比 やや多い)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 通常、越冬世代成虫の発生最盛期は6月第4半旬頃である。
- (2) 稲ワラや刈り株等で幼虫越冬し、年2回発生する。
- (3) 稲ワラ(敷ワラ)を使用する野菜・チャ・イチジク栽培地域等で発生しやすい。
- (4) 6月末に葉鞘変色茎の割合が全体の5%以上の場合、そのまま放置すると経済的被害が発生する。



幼虫と蛹

3. ヒメビウンカとイネ縞葉枯病

予報内容 発生量 : **ヒメビウンカ 平年比 多い** (前年比 多い)
イネ縞葉枯病 平年 並 (前年 並)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) **ヒメビウンカ**は、イネ科雑草で越冬するため、前年の発生状況等が翌年の発生に影響する。
- (2) 通常、**ヒメビウンカ**第一世代成虫の発生最盛期は6月第3半旬頃である。
- (3) **イネ縞葉枯病**は、**ヒメビウンカ**により媒介され経卵伝染する。

雌成虫



4. ツマグロヨコバイ

予報内容 発生量 : **平年比 やや多い (前年比 やや多い)**

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 4齢幼虫でイネ科雑草において越冬する。
- (2) 直接吸汁加害する他、イネ科萎縮病等を媒介する。



雄、雌

5. イネミズゾウムシ

予報内容 発生量 : **平年比 やや多い (前年並)**



成虫

成虫被害

果 樹

1. フドウ ベと病

予報内容 発生量 : **平年並 (前年比 やや少ない)**

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 初発生は、葉より花穂からの場合が多い。
- (2) 発病適温は22～25℃である。
- (3) 5～6月に多雨であると多発生となりやすい。
- (4) ハウス栽培では、過繁茂を避け通風をよくする。
- (5) 新しく柔らかい組織に発生しやすいため、窒素肥料の多施用は避ける。

2. カキ 落葉病

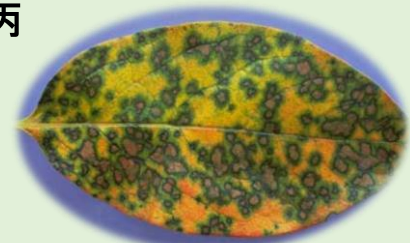
予報内容 発生量 : **平年比 やや多い**

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) **角斑落葉病**と**円星落葉病**があり、前者の発病は7月から、後者は9月から見られる。主な感染時期は前者が6月中旬から7月中旬で、後者が5月下旬から7月上旬である。前年の被害葉(落葉)に形成された前者は分生子、後者は子のう胞子が第一次伝染源となる。降雨の多い年ほど被害が多い。感染時期の防除を徹底する。



角斑落葉病



円星落葉病

3. **カキ** うどんこ病

予報内容 発生量 : 平年比やや少ない (前年比やや多い)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 前年の被害葉(落葉)や枝・幹の表面上に形成された子のう殻内の子のう胞子が第一次伝染源となり、5～6月から発病が見られる。
- (2) 5～6月に降雨の多い年ほど被害が多い。



4. **果樹全般** カメムシ類

予報内容 発生量 : 平年比 多い (前年比 多い)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 園外から飛来して局地的に発生するので、特に山林などの隣接園では注意する。
- (2) 夜行性であるため、夕方の防除が効果的である。
- (3) 合成ピレスロイド系薬剤の連用は、ハダニ類やカイガラムシ類の多発を招く場合があるので、注意が必要である。

チャバネアオカメムシ



クサギカメムシ

ツヤアオカメムシ

野菜

1. **果菜類** 疫病・褐色腐敗病

予報内容 発生量 : 平年 並 (前年 並)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 病原菌は水媒伝染するので、ほ場の排水に努める。特に、降雨時の地表水を速やかに排水する。
- (2) マルチを張り、泥によるはね上げ伝染を防ぐ。 また、溝に落ちて浸水したと思われる蔓は摘除して、ほ場外へ持ち出し処分する。



トマト



2. 果菜類 うどんこ病

予報内容 発生量：平年並（前年比 やや少ない）

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 初発生時期が早いと多発し、被害が大きくなる。
- (2) 施設栽培で発生しやすく、高温乾燥が続くと発生が多くなりやすい。
- (3) 過繁茂を避け、肥培管理に注意する。



キュウリ



かぼちゃ



トマト

3. キュウリ ベと病

予報内容 発生量：平年比 やや多い（前年並）

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 曇雨天が続くと、初発生及びまん延期が早くなる。
- (2) 肥切れしたり草勢が衰えると発病が多くなるので、肥培管理に注意する。



4. キュウリ 斑点細菌病

予報内容 発生量：平年比 やや多い（前年比 やや多い）

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 降雨等により病原細菌が飛散し、葉及び果実の気孔等から侵入して発病するが多い。
- (2) 曇雨天が続くと急速にまん延するので、気象の変化に注意する。
- (3) 発生してからでは防除が困難となるので、予防防除に努める。



5. ネギ さび病

予報内容 発生量：平年比 やや多い（前年並）

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 春季と秋季に比較的低温で降雨が多いと多発する傾向がある。また、前年の秋に多発して、冬が温暖多雨に経過すると、春に多発する。
- (2) 肥切れや窒素肥料のやり過ぎは発生を助長するので、適正な肥培管理に努める。
- (3) 被害葉は伝染源となるので、ほ場周辺に放置せず、適切に処分する。



6. 野菜類 アブラムシ類とモザイク病

予報内容 発生量 : 平年比 やや少ない (前年比 やや少ない)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) **アブラムシ類**には直接吸汁加害するだけでなく、**モザイク病**を媒介するものもいる。
- (2) 通常、無翅虫で集団加害するが、密度が高まると有翅虫が現れて分散し、発生が拡大する。
- (3) **高温乾燥が続くと発生が多くなる。**
- (4) **キュウリの急性萎凋症**の発生の多いところでは、**アブラムシ類**の飛来に特に注意するとともに、ワクチン苗の利用も考慮する。



7. 果菜類 ハダニ類

予報内容 発生量 : 平年比 やや少ない (前年比 少ない)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) **高温乾燥が続くと、発生が増加する。**
- (2) ハウス栽培では、天候に関わらず増殖しやすい。
- (3) ハウス内及び**ほ場周辺の除草を徹底する。**



8. 果菜類 アザミウマ類

予報内容 発生量 : 平年比 やや少ない (前年比 やや少ない)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 直接加害するだけでなく、**ウイルス病**を媒介する**ミカンキイロアザミウマ**や**ネギアザミウマ**等の種類もいる。
- (2) ハウスや雨よけ栽培では**高温乾燥が続くと、特に多発しやすい**ので注意する。
- (3) ハウス内及び**ほ場周辺の除草を徹底する。**



9. アフラト科野菜 コナガ

予報内容 発生量 : 平年 並

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 年間の発生回数が多く(10~12回/年)、各発育段階(卵、幼虫、蛹、成虫)が混在する。
- (2) 雨よけ栽培の場合、降雨に関係なく急速に増殖することがある。
- (3) **防虫ネット等**を利用し、物理的防除に努める。



10. ネギ ネギハモグリバエ

予報内容 発生量 : 平年比 やや少ない (前年並)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 幼虫が葉肉部分を加害し、白い筋状の食害痕を残す。
- (2) 被害葉及び収穫残さが発生源となるので、残さは一箇所にまとめて積み上げ、表面をビニルで被覆する等適切に処分する。
- (3) 1葉あたり1～数匹の幼虫が加害するバイオタイプA (従来系統)とは異なり、10匹以上の幼虫で集中的に加害し、葉を白化させるバイオタイプB (別系統)の発生を確認しているので注意する。



幼虫



成虫



11. ネギ ネギアザミウマ

予報内容 発生量 : 平年並 (前年比 やや多い)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 年間、10世代以上くり返し、葉の表層を食害し、かすり状の食害痕を残す。ネギでは葉鞘分岐部や葉折れの内側に多く寄生する。
- (2) 本種は、ネギえそ条斑病の原因となるアイリス黄斑ウイルス (Iris yellow spotvirus: IYSV) を媒介する。
- (3) 薬剤散布の他、赤色系防虫ネットやUVカットフィルムによる物理的防除が効果的である。
- (4) 被害葉及び収穫残さが本虫の発生源となるので、残さは一箇所にまとめて積み上げ、表面をビニルで被覆する等適切に処分する。
- (5) 殺虫剤散布後は効果を十分に確認し、感受性の低下が疑われる場合は系統の異なる薬剤をローテーション散布する。



幼虫



成虫